

前回は、地図の神竜頭首工の歴史について触れた。丸木舟による交通時代は、丸木舟の往来ができないカムイコタンから上流へは、地図のハルシナイ(春志内川、現・神居第四線川)の川口から、再び丸木舟に乗り、上川の地に向かうのであった。現在では、ハルシナイの上流約五百坪の所に神竜頭首工があり、往時の石狩川と様相が違うことを意識して、以下お読みいただきたい。

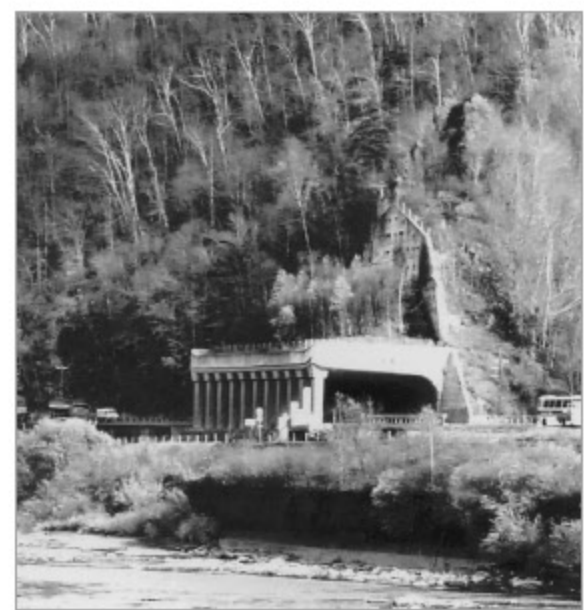
また、前回は、明治七年七月十三日に、ハルシナイから四十八人のアイヌの人たちが、十一艘の丸木舟を漕ぎ、開拓使御雇外人の地質学士兼鉱山師長のライマン一行が、総勢五十六人で上流へ向かったことも紹介した。

明治十九年六月二十四日に、空知太(そらちた)からの上川仮道路が竣工して、丸木舟時代は終わりを告げた。以下、次号にかけて、幕末から上川仮道路が竣工するまでの丸木舟時代の踏査記録に残る、ハルシナイから上流へ向かう記述を紹介し、往時に思いを馳せてみよう。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

76

高橋 基



(2) 鬼の躰



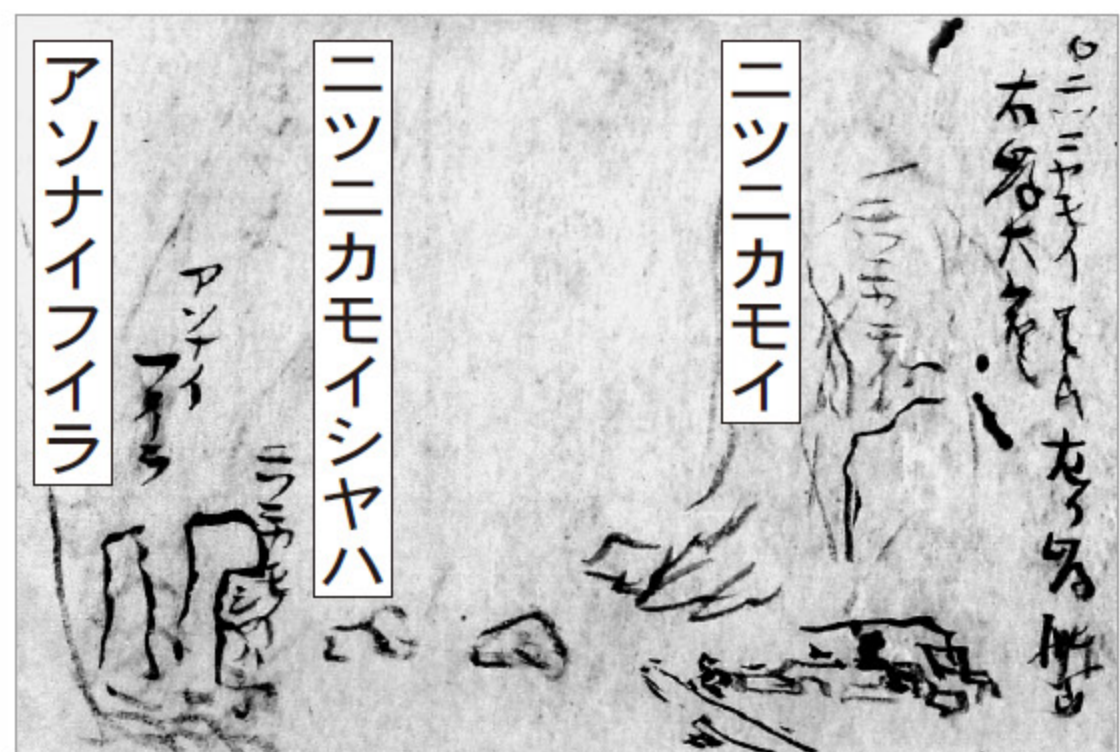
(1) 鬼の首

—ハルシナイから上流へ①—

まず最初は、当連載⑥でも紹介した安政四年(一八五七年)五月二十六日(陽曆六月十七日)の松浦武四郎の「再(ま)篙(か)石狩日誌」を再掲する。これは最も古い記録で、しかもアイヌ語を理解していた松浦武四郎が、案内のアイヌの人たちから聞いた、「鬼神(nitnekamuy)伝説」を書き留めた貴重な記録である。

その上、巧みなスケッチで、伝説の岩を描いているところが益々資料価値を高めている。

既に見てきたように、まず、地図の右岸に、神(サマイクルカムイ)に切られた、「ニツネカムイサバ(鬼の首)」の岩



(3) 『巳第二番』



(4) 「再篙石狩日誌」

がある。松浦武四郎は幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」で、その由来と儀式について、次のように書いている。

「ニイツイカモイ―左(註・上流)に向かって左(右岸)の方、岸に、高さ二丈計(約六(尺)程)の人の首の如き岩有。是を鬼の首なりと云ふ。アイヌ等此前へ木幣(まは)を削て奉る。ニイツイと云ふは鬼の事也。カモイは神也。昔、鬼此処まで上り神と合戦をして、神に負けて切れし首なりと申し伝えたり。此(か)切(き)り腕(うで)のまたは股のと申すさまさまの岩有。」

写真(1)は、「鬼の首」の現在の姿で、大きさがわかるように筆者が前に座

える「ニツニカモイシヤハ(nitnekamuy-sapa 鬼の・頭)」が「鬼の首」で、実物と酷似している。武四郎のスケッチと比較すると、現在の「鬼の首」の下部が土砂で埋まっている。安政期の石狩川を知る重要な手がかりである。

写真(2)が、左岸の「鬼の躰」の遠景で、国道十二号線の拡張工事で、「鬼の躰」の大岩が破壊されるところを、地図の「ニツネカムイ覆道」を作り、アイヌ伝説の大岩が漸く保存されたものである。

写真(4)は、「再篙石狩日誌」の添え画で、写真(3)の野帳のスケッチを元に、改めて描いたもの。松浦武四郎の直筆である。「鬼の躰」については、武四郎は、次ように記述している。

「カモイ子トバケ(nitnekamuy-otopake 鬼の・躰)―山岸に高さ七八丈(約二十一、二十四(尺))の大岩ニツ有。是はニイツイカモイの躰の由也。子トバケは身と云事。此(か)処も急流なるが故に、兩人は岩の上へ乗り、四人にて棹(こ)さし引き上る也。」

写真(4)の下部に「丸木舟」と記したのは、「鬼の躰」の下流の激流を、二人が岩の上から綱で丸木舟を引き上げ、四人のアイヌの人たちが棹で突っ張り、丸木舟を上流へ向かい漕いでいる図である。松浦武四郎は、右の文の「線部の通りに忠実に絵に描いている。写真のない時代の傑作添え画といえる。



って写したものである。写真(3)は、松浦武四郎がこの調査に持参した野帳(ちやうちやう)の「巳第二番」のスケッチで、左側に見

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します